学園長だより 第39回

校訓 剛健質実

愛知淑徳学園理事長・学園長 小林素文

愛知淑徳学園の『校訓』を揮毫された加藤鐐五郎氏について『学園八十周年小史』に概略次のように記されています。

1912年愛知淑徳の校医に就任された加藤氏は、創立者小林清作先生と意気投合し、連夜にわたり夜を徹して世界情勢やら国政などを話合われた。後にその会は馬喰会となり、名古屋市政を揺るがすまでになった。そうしたいきさつから国会議員になられた加藤氏は、1935年死期を悟った清作先生が遺言を託すほどの仲となっていた。戦後は法務大臣や衆議院議長などで活躍の一方、愛知淑徳の理事として小林素三郎先生の良き相談役となった。

＊

以下は、父素三郎から「志のある清廉な政治家であった」と聞いていた加藤氏のことを知りたく取り寄せた『加藤鐐五郎伝』に基づきます。

「私は若いころは弁護士か新聞記者になりたいと思っていたのです。ところが親が反対でございまして、是非医者になれ、ということで、今でも思い出しますが、「お医者様とは言うが、お弁護士様とは呼ぶまい」といわれました。」

こうして愛知医学校（現在の名大医学部）に入学したものの、加藤氏は社会への関心が強く、新聞に投稿を重ねているうちに論説をまかされるようになります。医者になってからも、馬喰会を主催し、やがて、自らが政治家となっていきます。

一方、加藤氏は次のように語られています。

「私は以前から内村鑑三先生に私淑し、多大の感化を受けました。ところが先生は私の政治家志望に大反対で「政治家は汚穢屋のような者だ」と申されました。私は先生の意向に反して政治家になりましたが、先生の教えを守り、清潔であることに一生を賭けました。それですから、かくすればかくなる、とわかっていても、この信条を守り抜いたので、ついに政界実力者にはなれませんでした」

とはいえ、戦後法務大臣となり衆議院議長も勤め上げていますが、そのいきさつがいかにも加藤氏らしい。

法務大臣に任命されたのは、造船疑獄に対する指揮権発動で辞任に追い込まれた犬養法相の後任、衆議院議長に任命されたのも、警職法改正をめぐる国会審議混乱から辞任に追い込まれた星島議長の後任としてでした。いずれも加藤氏の清潔な信条が与野党の信頼を得ていたからの起用でした。加藤氏はこの混乱を収束したことに多くを語らず「後始末専門のヤブ医者」と自称されました。

衆議院議員に12回当選している加藤氏も2度挫折を味わっています。

一度目は1937年に落選した時。議員失職中、加藤氏は母校の医学研究員となり、論文を書き上げ、それにより医学博士となられました。

二度目は戦後公職追放になった時。加藤氏はこの機会を生かし、禁煙をうながすうがい薬『キンエン』を開発されています。

＊

親のすすめで医者となったものの、心に抱いていた、「弁護士や新聞記者になり社会問題と係わりたい」、との思いは、政治家になることでかなえ、私淑する内村鑑三の教えを守り清潔に徹し、2度の挫折にもこれを機会と医学に貢献された加藤氏は、ご自身が揮毫された、『校訓』にある剛健質実の人といえましょう。

＊

創立者の親友であった縁から、生涯にわたり愛知淑徳を側面から支えてくださった加藤鐐五郎氏に心よりの感謝を申し上げます。

合掌